
中華風恋愛小説

tocota

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中華風恋愛小説

【Nコード】

N4338X

【作者名】

t o c o t a

【あらすじ】

中華風ファンタジーの恋愛小説。恋愛に淡白な女の子が恋をするまでのお話です。

曼珠思想（前書き）

一 夫多妻制の世界観です

曼珠思想

お義母さまがいけなかったんだと思う。

「結婚は女の墓場、したが最後、あとは忍耐あるのみよ」
なんて私に吹き込んだのは、お義母さまだもの。

曼珠思想というものがある。

この世界の根本となる思想だ。

世界の中心となる「珠」には、たくさんの花びらがつく。放射線
状にそれは広がる。曼珠沙華の花のように。

この思想を最初に言い出した「公孫勒」という人の名前をとって
「公孫思想」って呼ぶときのほうが多いけど、私は「曼珠思想」っ
ていう名前のほうが好き。

ところで結婚において、この「珠」っていうのは、男の人のこと
を指す。

つまり、家庭の中心である男の人には、たくさん花びら「妻」
がつく。

珠の質が良ければ良いほど、花びらは多くなる。「珠の質」は、
個人の能力とかも指すけれど、一般的には身分のことを言う。

男の身分と妻の数は正比例、というわけだ。

私の父は、そういうところ淡泊な人だった。

だから田舎の豪族とは言え、あそこの山からこっちの山までうち
の財産なんていうレベルの他豪族に比べれば、妻の数は少なかった。
私の母と、母が亡くなった後に娶ったお義母さまと、二人だけ。

親戚の中にはそれをみつともないと渋い顔をする人もいた。
だって「妻」の数が「男」の質を表すバロメーターでもあったか

らだ。

それでも父は面倒がって、妻を増やさなかった。そういうことを面倒がるところ、私は父に似たんだろう。

それにお義母さまの影響も大きかった。

義理とは言え、私はお義母さまが大好きだった。

「曼珠思想」が当たり前の世の中で、お義母さまの考え方はすごく斬新だった。

「女は男の質を表すためだけの飾りじゃないわ。結婚は女の墓場よ」堂々とそう言いきり、気だるそうにため息をつく姿は、かっこいいとしか表現できなかった。

私はお義母さまが大好きで、幼い頃からお義母さまのお部屋に通い、お義母さまの女の哀愁漂う話を聴いていた。

今から考えると、子供が聞く話ではない。

お義母さまはいろいろ斬新な方なので、そんなところで子供と大人の区別をつけたりはしなかった。女がどんなに不幸な生き物であるかを、気だるいため息を交えてとつとつと教えてくれた。

とは言え私は子供だったから、お義母さまの話を半分も理解できていなかった。

それでも、翡翠や真珠の髪飾りを揺らし、たった一人の夫を独占しているのに、それらすべてを不要と言い切るお義母さまはかっこよかった。

私はお義母さまにあこがれていた。

幼馴染

幼馴染に夏之盛という男の子がいた。

母方の親戚の子で、12歳くらいまで私の家で暮らしていた。

家の長男が、幼少時代に格が一段高い家に居候して、行儀見習いのようなことをするのはよくあることだった。うちにも何人か彼のような子供がいたはずだけど、私と年が近いのは彼しかいなかった。私は彼より4つ年下だった。

彼は多少理解していたかもしれないが、私は幼すぎて、自分の家の格など知らない。彼を兄ちゃんと呼んで慕っていた。

私が8歳になるまで、私たちは本当に兄妹のようだった。

毎日2人で野山を駆け回り、花や草をつんで、一緒に読み書きを習って、一緒に風呂に入って、一緒に寝た。

どのタイミングか思い出せないが、あるとき急に彼は変わった。

「俺と結婚しろ」
と言った。

彼が我が家を去る半年くらい前のことだ。

そのときの彼の言い知れない迫力というか、鬼気迫る雰囲気というか、そんなものがとても怖かったし、周りの空気をとろりとやわらかくするような感覚が気味悪かった。

「やだ」

私は叫んで、お義母さまのところに逃げ帰った。

逃げてきた私を、わけも分からないだろうに、それでもお義母さまは優しくなでてくれた。

「結婚は女の墓場よ」

いつも聞いている言葉なのに、その日はやけに真実味を帯びて聞こ

えた。

初めて感じた恐怖のような感覚、それとヒモづいているに違いのない「結婚」という言葉。

「やはり、結婚は良くない。女の墓場なんだ」

鬼気迫るほど真剣にうなずきながら、お義母さまの言葉を聴いた。

之盛の様子は尋常じゃなかった。

どうしてあんなふうになってしまったんだろう、そう思うときびしくもあつたけど、子供だからそこまでは考えなかったと思う。

之盛は非常にしつこい性格だ。

勉強のときも、武術の稽古のときも、彼は「できないこと」にぶつかるとできるようになるまで、本当に粘り強くがんばる男の子だった。

そんな彼を尊敬していたし、自分もこんなふうにがんばらなくちゃいけないんだって、目標にしていた。

もちろん「結婚」に対しても粘り強さは遺憾なく発揮された。

どこにでもついてきたし、やたらと髪をなでるようになったし、かと思うと遠くからこっちをにらんでいたし、意一緒に寝たりお風呂に入ったりしなくなったのは、本当に良かったけど、もう、気持ちが悪くてしかたがない。

私は今までのように一緒に遊べなくなって、お義母さまの部屋に避難することが多くなった。

京の叔父様

父の弟である、康二堅は帝都に住んでいる。

持ち前の明るさと社交性で、何だかよく分からないうやむやな商売で成功して、帝都に居を移した。

妻が三人いて、いずれも劣らぬ美女ぞろい。

ただ三人とも我が強いようでしょうちゅう喧嘩になり、その火の粉が降りかかってくると、叔父は私たちの家に逃げてくる。

でも逃げてきたというと聞こえが悪い。叔父はいつも言い訳を言う。「お義姉さんが風邪を引いたって聞いてね」とか「新しく商売を始めるんだけど、兄さんにも相談に乗ってもらいたくて」とか、いろいろ。

今回の言い訳は「皇帝のお妃を募集しているけど、露真ちゃんはどうかい？」というものだった。

ちなみに「康露真」が私の名前。

父もお義母さまも、もちろん聞き流した。叔父も本気ではなかっただろう。

曼珠思想からいうと、質の良い男にはたくさんの妻がつく。質とは身分。

つまり、国で一番えらい皇帝にはたくさんの妻がつく。多ければ多いほどいい。妻が多ければ、皇帝の質がいいということになる。

今の皇帝はすでに50をすぎた高齢で妻も20人ほどいたはずだが、何かの都合でさらに妻を募集することになったらしい。

妻が多ければ皇帝の質がいい。

逆に言えば、妻を多くすれば皇帝の質が上がるということ。

国の政治がうまくいかなくなると、よくこういうことが行われる。もちろん皇帝一人で何十人も妻を相手にできるわけがないから、本当に飾りだ。

それでも興入れできれば、皇帝の親戚になれる。もし万が一皇帝に気に入られて皇子でも生もうものなら、さらに位は上がる。

時の権力者たちはこの行事が大好きだったに違いない。

しかし興入れする女は悲惨だ。

一度後宮に入れば、二度と出られない。実際どうであれ、名目上皇帝の妻だからだ。

皇帝の妻として、しかし実際の「妻」の役割は一つもなく、ひっそりと後宮で老いていかなければならないのだ。

なので若い娘を皇帝に差し出そうとする親はあまりいない。

本気で皇帝の子を生む気があるか、権力にすがりたいか、誰かに恩を売っておきたいか、まあそんな理由でもなければ。

私はお酒の席で、叔父たちがそんな話をしているのを聞いていた。之盛がこわいから、いつもお義母さまのそばにくっついていたのだ。

父は一切本気にせず、返事もしなかった。叔父も本気ではなかっただろうから、返事がないことに何も言わなかった。

お義母さまは、二人にお酌をしながら、自分もお酒を飲んでいた。

「誰と結婚したって、結婚は墓場よ。結婚したらもう終わり。それならいっそのこと、最高の飾りである皇帝の妻となって、飾りだと割り切って生きるのもいいかもしれないわねえ」

酔ったお義母さんがそんなことを言った。

「またまた、お義姉さん。兄さんにこんなに愛されているのに、どうして毎回そんなこと言うんだらうねえ」

叔父はカラカラ笑っていた。

興入れ

暗い夜。

大人たちはお酒をなめながら、楽しそうにおしゃべりをしている。いつも仏頂面の父でさえ、蠟燭の明かりを受けて酔いにほほを染め、楽しそうに見えた。

だから私は疎外感が強くなる。

大人の酒の席にいてもつまらない。積み木で遊んでいたけれど、その積み木をそこに放り投げてこっそり部屋を出た。

部屋と部屋とをつなぐ廊下は暗い。

見上げるとその日は満月だった。

でも、やっぱり夜なのだ。暗い。

「おいっ」

いきなり腕をひっぱられた。

背中を石の壁に打ち付けて、顔をしかめる。

ひっぱったのは、之盛だった。怖くなって肩をすくめると、之盛は少し腕の力を緩めてくれた。でも離してくれたわけではない。

「おまえ、俺をさけてるだろ」

「さ、さけてないよっ」

さけているのに、なんでさけていないと言ったのか分からない。

最近の之盛は身の危険を感じるような怖い雰囲気だから、イヤなのだ。いやでいやでたまらなくて、つい反抗するような態度をとってしまった。

「さけてる！」

之盛は4歳年上。体格でも力でも勝てない。

「俺と結婚するのがイヤなのか？」

怒鳴るような声だったのに、ふと見上げたら之盛が泣きそうな顔をしていたのでギクッとした。

理由もなく結婚するのがイヤと言ったら、ひどいことになりそうな気がした。

「私、皇帝の奥さんになるの！」

私は適当なことを言ってしまった。

「だから之盛と結婚しないの！」

必死だったのだ。

之盛のそばにいますと、絶対に良くないことが起こるような予感がして、怖かった。

怖くて怖くて、とにかくここから逃げられるなら、皇帝の奥さんでもなんでもいいと思った。

それにお義母さまも言っていた。

最高の飾りとして生きるのも悪くないって。

「ばかっ」

之盛の顔色が変わった。

「おまえみたいなちんくりんが、皇帝の奥さんになんてなれるわけないだろ！皇帝の奥さんっていうのは、みんな絶世の美女なんだよ！」

「なるよ！だから叔父さまが迎えに来たんだから！」

叔父の存在が説得力を増したのか、之盛は手を放した。

私はそのまま走って、酒宴の部屋へ戻った。

「叔父さま、私を帝都へ連れて行って！私は皇帝の奥さんになりたいの！」

大人たち全員が面食らった。

私は泣いてすがって、叔父から離れなかった。

そのあと当然ながら混乱があつたが、叔父がけっこう乗り気だつたため、次の年、私はめでたく輿入れすることになった。

8歳の夏。

輿入れの花道には、曼珠沙華が群生していた。

花嫁修業

鮮烈な紅の衣装。

紅の布で飾られた輿。

道いっぱいの曼珠沙華。

てっきり輿入れしたのかと思った。

けれども皇帝の妻になるのが
そんなに簡単なわけではない。

到着したのは帝都の叔父さまの家だった。

でも私は子供だし、帝都に来るのも初めてだった。

叔父さまが何の商売をしているのか

いまだに分からないけれども、

成功しているのは分かる。

そのときの私が「ここが皇帝のおうち」と

思い込めるほどの邸宅だった。

私は迫力負けして呆然としていた。

ここまでの道のりで多少さびしくなったり、

後悔したり、逆にうきうきしたり、

いろんな感情に支配されていたが

全部吹き飛んだ。

叔父さまに手を引かれて屋敷を歩く。

口を丸くあけたまま、きよろきよろしていた。

叔父さまが私の靴を脱がせて足を洗ってくれた。
そのあと紅色のうっとおしい服は脱いで、
軽い普段着に着替える。

ほっとした。

叔父さまはそんなことをしながら

私にこれからのことを説明してくれていたけど

私は子供だし疲れていたので

ほとんど理解できなかった。

私はこのまま皇帝の妻になれるわけではない。

お金と土地を多少持っているとは言え、

私はただの田舎の豪族の娘だ。

まず、私は帝都の権力者の娘となる。

養子縁組だ。

その間に後宮の礼儀などを叩き込まれる。

急な話だったので、それを半年の間にやらなければならなかった。

毎日来る家庭教師は怖いし、

めまぐるしく行事が続くし、

もう嫁入りした気持ちになっていた私は

どの人が皇帝なんだろうと不思議に思いつつ、

結婚はやっぱり良くなかったなと思っていた。

入宮

叔父の家で半年のスパルタ教育を受けて

私は一通りの後宮のしきたりや礼儀作法を身につけた。

それでも「まだ幼いからこれでいいか」というレベルだったと思う。

本当の輿入れのときは、私は何かの出し物に出演するような気持ちでいた。

輿入れと言っても、私はまだ8歳で、本当の「妻」になるには子供すぎて

嫁がせる大人たちも私に何も期待していなかっただろう。

それに輿入れは他の妻7人と一緒だったから、

本当に私はおまけみたいだった。

お姉さんたちはとてもきれいで、

ぴりぴりしていた。

珍妃などは私に悪いことばかり吹き込んできたけど

もともと悪いものだと思っていた私は

怖いとは思ったけどショックではなかった。

美しく初々しい7人の新しい妃とおまけの私。

石畳の道には赤い布が敷かれ、どこもかしこも爆竹を鳴らす。

笛や太鼓の音楽が、それぞれ勝手に鳴り響くので騒音にしか聞こえない。

それでも京城はお祭り騒ぎで、皆が私たちを祝福してくれたと思う。

だって私は紅の輿の中から街の人たちの様子を見て
感動で胸が詰まったのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4338x/>

中華風恋愛小説

2011年12月4日09時54分発行